

「カースト・ジョーク」研究の課題と展望

山本, 勇次
活水女子大学

<https://doi.org/10.15017/2320985>

出版情報 : 九州人類学会報. 14, pp.31-35, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

「カースト・ジョーク」研究の課題と展望

山本 勇 次

(1)

著者は、昭和60年7月20日の九州人類学会研究会において「ポカラ（ネパール）のカースト社会とカースト・ジョーク」と題する研究報告を発表させて戴いた。しかし、その発表に基づく論文はまだ準備不足のため、本稿では現時点における著者なりのカースト・ジョーク研究の諸問題を総括してみることににより、その研究報告のレジナに替えさせて戴くこととしたい。

(2)

ポカラは、ネパールの首都カトマンズの西方200kmにある人口約5万（1981現在）の小都市である。この都市には、バフン（Bahun）、チェトリ（Chhetri）、ネワール（Newar）、グルン（Gurung）を四つの優勢カーストとする20余りのカースト（jat）から構成されるカースト社会がある。ここには、(1)バフン、(2)チェトリ、(3)ネワール・グルン等の「飲酒カースト（Matwali）」、(4)「不可触民（Nachhune）」という明瞭な儀礼的地位の序列が見られる。このポカラが1970年代初頭から急速な都市化の渦流に巻きこまれ、現在それゆえの激しい社会的、文化的変容に見舞われていることは、別稿（山本、1985）その他において触れておいてある。

この都市化によるカースト社会の変容という点を要約すれば、以下の二点が顕著であろう。第一に、異カースト間の接触量が極めて増大しており、そのことの結果として、相互のカースト境界の曖昧化が起ってきている。共通の教育施設や職場への汎カースト的参加、貨幣市場内での異カースト間交換の激増、カースト通婚の増加、さらには「ネパール化」による言語的文化的収斂現象の進行などにより、それぞれのカーストの伝統的な特異性が色褪せてきているのである。

第二に、貨幣経済の浸透により、個々のカースト内部はもとより、総体的に見たカースト相互間にも「貧富の差」が歴然としてきたのである。上記四大優勢カースト群を例に見れば、伝統的な農本主義に固執する傾向の強いバフンとチェトリでは、早くから都市のなかで貨幣市場社会を経験してきたネワールやグルンと違って、貨幣市場化への対応に失敗して経済的後退を余儀なくされる者が多出している。従って総体的に見て、ネワール・グルン達が貨幣市場化の波とともに経済的地位を上昇させているのに対して、バフン・チェトリ達は、その経済的地位を益々低下させている。この結果、伝統的な儀礼的地位の序列では、バフン>チェトリ>ネワール・グルンであるが、新興の経済的地位の序列ではネワール・グルン>バフン>チェトリという状態が生じてきている。つまり、「儀礼的」と「経済的」という二系列の階級序列の「くい違い」の生成により、「序列の不確定性」という状況が発生しているのである。私見では、このような階級序列の不確定性は、彼らをして「認知的不協和（cognitive dissonance）」（Festinger, 1957:1-31）を抱かしめていると思える。そして重要なことは、以上に述べたような都市化によるカースト社会の変容という文脈のなかで、カースト・ジョークが次々に創出され、継承反復されてゆくことである。

(3)

著者の見解によれば、カースト（ならびにエスニック）・ジョークに関する調査のポイントは、(1)「ジ

ヨーク内容」と、(2)そのジョークが発話(「パフォーマンス」と言ってもいい)される場面での「コンテキスト状況」とを同時に調べあげることであろう。(1)からは、ジョークの中の登場人物間にある種の「恣意的」なカースト関係が描かれるだろうが、そのようなカースト関係は殆んどの場合、「現実のカースト関係」のデフォルメであるようである。それに対して、(2)からは、そのジョークの「演者」と「聴取者」、さらにそのジョークの中で「嘲笑の対象」と規定される者との間にある具体的なカースト関係が設定され、それらの「現実のカースト関係」をめぐる社会的・感情的脈絡は、このジョークを共有する少なくとも「演者」と「聴取者」との間では、「暗黙の前提(unspoken premise)」として、非常に明瞭に意識化されて共有されているはずである。そして、この暗黙の前提を規定する状況として、前述の「都市化によるカースト社会の変容」というものが重要な意味を持っていることは言うまでもない。

G. Bateson(1972:177-193) 風の言い方をすれば、「ジョーク内容」とはあくまでも「枠付けの現実(framed reality)」であるのに対して、「コンテキスト状況」に含まれる(演者と聴取者の間で共有される)「暗黙の前提」は、彼らの「現実」であると言えよう。従って、これらの二つの異なる現実の間には、「論理階梯」の差が存在することを見落としてはなるまい。ロジェ・カイヨワ(1973)の聖一俗一遊の三次元図式を借りれば、前者の現実は「遊」の領域に属し、後者のそれは「俗」に位置づけられるものであると言い換えることも出来るだろう。重要なことは、この二つの現実の間には不分離かつ相補的な意味連関があること、さらに、この意味連関があるからこそ二つの現実の「交錯」するところに成立するジョークが社会的機能を持ちうるのだというポイントであるだろう。

私見では、従来の笑い(ジョークをも含めて)の研究には、笑いが前述した「二つの現実」を交錯するところに成立するものだという視点が弱かったように思える(参照:山本、1986)。このことは、従来の笑いの研究が、ジョーク内容とか喜劇的文芸作品の内容のみの分析に明け暮れしてきたことと無関係ではないだろうと思われる。従って、このような方法論的反省に出発点を持つ著者のカースト・ジョークの調査は、カースト・ジョークが日常生活の場で実際にパフォーマンスされる場面を参与観察することを重視してきたつもりである。

勿論、著者の調査方法には調査遂行上の実質的な難点があることは確かなことである。その第一は、一定期間のフィールドワーク中に生のカースト・ジョークのパフォーマンスの場面に遭遇する機会が限定されるということである。(著者の2年半のボカラ調査で40例ほどに過ぎない。)従って、数量的には迫力が欠けることは、正直な所、頭の痛い問題なのである。その第二の難点は、データの殆んどがチェトリ・コミュニティから収集されたものであるから、チェトリとは異なる他のカーストの視点というものを分析できないところにある。しかしながら、従来のフィールドワークでは「総論的」な調査に力点を置いていたので、今後の再調査を利用して「各論的」な、テーマを限定した調査をしたいものだと考えている。上述の調査法の難点は、次回の調査で克服することが出来るように思えるだけの準備が現時点では整っていると見えよう。

(4)

現在保有するデータからは、以下に述べるカースト・ジョークの四類型を整理することが出来るようである。第一の類型を「不確定解消型」と呼ぼう。これは、チェトリ達がネワール・グルンとの間の序列不確定性から派生する認知的不協和を低減する動機から、ジョークの中でネワールやグルンの「ステレオタイプ」な「カースト・イメージ」の劣性部分を誇張し、嘲笑するものである。

第二に、「階級逆転型」と呼べるものがある。これは、チェトリ達が自分らよりも儀礼的にも経済的にも地位の高いバフンをジョークの中に取り上げ、そのステレオ・タイプなカースト・イメージの劣性部分を嘲笑し、溜飲をさげる機会とするものである。

第三の「スケープゴート型」と呼べるものは、チェトリ達が自分達よりも儀礼的かつ経済的に地位の低いマガルやアンタッチャブルの「弱小カースト」をジョークのなかで取りあげ、蔑笑の標的とするものである。

第四には、「自己言及型」とも言えるものがあり、そのなかでは、チェトリ達が自己カーストのステレオ・タイプなイメージの優性部分を誇張して笑い合うもの（「自慢型」）と、同様の劣性部分を誇張して自嘲的な笑いを楽しむもの（「自嘲型」）とが見られる。

いずれの類型のカースト・ジョークにもステレオ・タイプなカースト・イメージがその重要な構成要素として使用されていることは、見落してならない点であろう。この点を現在のボカラの社会的文脈上で意味すれば、現実のカースト境界が曖昧化しかけていると誰れもが認知するからこそ、カースト・ジョークの中でステレオ・タイプなカースト・イメージを強調することによりステレオ・タイプなカースト境界性を維持させる社会的機能を持たらしめていると考えられないだろうか。そして、これが現在の時点で考うる仮説的命題の第一である。さらに、この仮説を補強する事実として、カーストの「渾名 (upanam)」がある。たとえば、バフンには「欲深い (ヒンドゥ教の) 司祭者 (tapare bahun)」とか、ネワールには「憶病者 (kukhura)」とか、グルンには「酔払い者 (jadhya)」とか、マガルには「うすのろ (lide)」とかがそうである。これらの渾名はカースト・ジョークのネタとして使用されるステレオ・タイプなカースト・イメージの劣性部分を象徴するものが殆んどである。従って、カースト・ジョークと共に、カーストの渾名も、ステレオ・タイプなカースト境界性の維持という社会的機能を保存しているように思える。

仮説の二つめとしては、“license to joke” (Handelman & Kapferer, 1972:488-490) というものがカースト・ジョークのパフォーマンスの予件として前提されていることである。カースト・ジョークの演者はその聴取者のなかに、ジョークの中で嘲笑の対象となるカースト該当者の不在を確認して、カースト・ジョークを始めることがルールのようなものである。この社交的礼儀を守らないと、カースト・ジョークのパフォーマンスの進行が途中で妨害される可能性が起りうるからだろう。実際に、かなり酩酊した男が、このルールを無視してカースト・ジョークを話しはじめたところ、嘲笑の対象とされたカーストの該当者が聴取者のなかに存在して、(この男も少し酩酊していたが) 喧嘩が始まったこともある。

しかしながら、このようなカースト・ジョークのライセンスは、演者と聴取者との間に「非常に親密な関係」が成立している場合には、別の意味合いをもつ。つまり、その場合には、このカースト・ジョークのライセンスの「意図的」な無視はある種の「親愛さを表明するためのからかい」と解され、そこでは Radcliffe-Brown (1952) の “joking relationship” に近い状況が設定されることになるのである。

(5)

「笑い」の現象は、これまで長い間哲学者や心理学者の考察の対象として独占され続けてきたようであるが、やっと最近になって一部の社会学者、文化人類学者の間にも熱い注視を呼び起し始めているようである。(参照・山口、1975; Chapman; Foot, 1977; 木村、1983; Ape, 1985) 諸学兄の批判を恐れ

ずに大胆な私見を述べさせてもらおうと、従来の哲学者や心理学者の笑いの研究は、笑いの「内容分析」が強調され、笑いのパフォーマンスの「コンテキスト分析」が殆んど無視されてきたと言えるのではないだろうか。それとは逆に、文化人類学者による笑いの研究の嚆矢とも言えるラドクリフ＝ブラウン（1952）の「冗談関係」の研究では、「コンテキスト分析」がすべてで、「内容分析」は全くないと言ってもよいだろう。従って、内容分析とコンテキスト分析の両方から笑いの現象を照射することこそ、文化人類学者として笑いを研究する者の「選ぶべき道」であろうというのが著者の現在の見解なのであるが、どうであろうか？

— 以上 —

参 考 文 献

Ape, Mahadev L.

1985 Humor and Laughter: An Anthropological Approach,
Ithaca & London: Cornell University Press.

Bateson, Gregory

1972 Steps to the Ecology of Mind.
New York: Chandler Publishing Co.

Chapman, Antony J. & Hugh C. Foot (eds.)

1977 It's A Funny Thing, Humour.
Oxford & New York: Pergamon Press.

Festinger, Leon

1957 A Theory of Cognitive Dissonance.
Stanford, Calif: Stanford University Press.

Handelman, Don & Bruce Kapferer

1972 "Forms of Joking Activity: A Comparative Approach", in American
Anthropologist, 74:485-517

カイヨワ, ロジェ (多田道太郎・塚崎幹夫 共訳)

1973 『遊びと人間』 講談社文庫。

木村 洋 二

1983 『笑いの社会学』 世界思想社。

Radcliffe-Brown, A. R.

1952 Structure and Function in Primitive Society,
New York: The Free Press.

山本 勇 次

1985 「エスニシティと階級：ネパールのカーストは利益集団か？」、『文化人類学』
vol. 1, No. 2, pp. 74-92。

1986 「認知的不協和と両義性：笑いの認知的理論に関する一考察」、
『活水論文集』第29集

山口昌男

1975 『道化の民俗学』 新潮社。